

蘭学者による翻訳と漢字・漢語：
翻訳語研究の語学的、科学史的射程

西嶋 佑太郎 *

Sino-Japanese Vocabulary in *Rangaku* Translation:
Linguistic and Science-Historical Dimensions

Yutaro NISHIJIMA

This report examines the translation vocabulary used in Dutch Learning (*Rangaku*) in early modern Japan, presenting the progress of the author's research and discussing its implications for future research on the histories of the Japanese language and science. The first section argues that translation vocabulary is not merely a substitution of Western concepts with Japanese terms but a crystallization of contemporary knowledge, requiring proficiency in Dutch, familiarity with Chinese translations of Western texts, and a precise understanding of the forms and meanings of Chinese characters, in some cases entailing the creation of entirely new characters. The second section examines examples from early modern medical texts, in which translation vocabulary and character creation arose from the intersection of Dutch, classical Chinese, and lexicographical knowledge. The third section discusses the use of loan translation (calque) as a key analytical framework, revealing a methodological continuity that underlies both translation vocabulary and character creation in medical and astronomical texts from the late eighteenth century onward. The fourth section demonstrates that translation vocabulary provides linguistic evidence for historical inquiry, illuminating relationships among *Rangaku* scholars and the transmission of knowledge, with broader implications for the history of science. The concluding section underscores that rigorous bibliographical study of primary sources remains indispensable, particularly as materials risk being overlooked in the process of digitization.

* 大阪公立大学文学研究科 講師
yutnishijima@gmail.com

キーワード：日本語史、翻訳語、造字、科学史、蘭学、書誌学

Keywords: history of the Japanese language, translation vocabulary, character creation, history of science, Dutch learning, bibliography

I. 知の結晶を解く——翻訳語研究の視座と射程

本報告は、近世日本の蘭学者が生み出した翻訳語を対象に、筆者がこれまで行ってきたオランダ語と翻訳語の比較対照による研究の進捗を報告するとともに、翻訳語の研究が今後、日本語学あるいは科学史の方面にどのように発展することが可能であるかという展望および課題を論じるものである。

近世日本において、西洋の学術知識は蘭学者たちによって主にオランダ語を介して受容された。その過程で蘭学者たちが生み出した翻訳語は、単に西洋の概念を日本語へと置き換えたものではない。一つの翻訳語が生まれる背景には、オランダ語の語義を正確に把握する語学力はもとより、医学・天文学といった当時入手可能であった漢訳洋書などの専門的知識、漢籍への深い素養のほか、漢字の字義や字形への深い洞察が総動員されている。その結果、従来の漢語にはない概念を表すために新たな漢字（造字）が創造される場合すらあった。翻訳とは、こうした多層的な知を一語・一字に凝縮する創造的实践であり、その産物である翻訳語は、まさにその時代の知の結晶ということもできる。

蘭学の翻訳語研究は、日本語史、とりわけ専門用語の歴史を明らかにするという目的をもつ。例えば「盲腸」「惑星」「引力」「酸素」など、自然科学の学術用語の多くは、蘭学の翻訳語を淵源としており、その形成過程を解明することは、現代日本語の語彙体系の成り立ちを理解するうえでも不可欠である。しかしこの研究が重要なのは、日本語史の解明にとどまらない。蘭学者が生み出した翻訳語は、その語を使用する者が増えることによって定着していく。ある蘭学者が既存の翻訳語を流用したのか、それとも新たに翻訳語を作成したのかということを分析すれば、当時参照できた書物の分析、そして人物間の影響関係の分析へと連鎖的に波及する。翻訳語研究は結果的に、医学史・天文学史などといった科学史の知見だけでなく、近世の学者のネットワークやそこにおける知の共有のあり方など、隣接分野の事象を解明する手がかりともなるものである。

本報告では、翻訳語という「知の結晶」から、視座を変えることによってさまざまな知見を引き出せるということを、筆者がまとめた博士論文『蘭学と漢字：医学語彙の研究』（西嶋 2026）をもとに示すとともに、今後の展望を述べる。以下では具体的な翻訳語の実例の検討から出発し、筆者がこれまで行ってきた訳語作成方法という語学的な視点での研究の状況を述べる。そのうえで翻訳語に着目することによる科学史への展開と展望を紹介し、さらにその基礎となる資料研究の現状と課題を述べる。

II. 一語・一字に凝縮された知——医学用語の実例から

蘭学者の作成した医学用語の翻訳語には、知の結晶としての様相が端的に示されている。

近世日本における蘭学者の翻訳としては、杉田玄白（1733-1817）や前野良沢（1723-1803）らによる『解体新書』（1774年刊）が有名である。これはオランダ語解剖学書を翻訳したもので、「神経」「盲腸」など多くの翻訳語が新たに創出された。『解体新書』以降も解剖学書の翻訳は相次ぎ、門人の大槻玄沢（1757-1827）により改訂された『重訂解体新書』（1826年刊）や、大槻玄沢の門人である宇

田川榛斎 (1770-1835) の『医範提綱』(1805 年刊) が知られる。『重訂解体新書』では「橈骨」「虹彩」など、『医範提綱』では「靱帯」「副腎」などといった翻訳語が新たに創出されており、いったん訳出された翻訳語に対しても別の翻訳語をあてるような試行錯誤が行われていることが分かる。さらに翻訳語は二字以上の漢語だけでなく、『重訂解体新書』には「臑」「脰」という既存の漢字を転用したもの、『医範提綱』には「腺」「臍」というこれまでにない新規の造字があるなど、漢字一字の用語というものも模索されていた。「腺」は腺の機能を液の源「泉」と考えて構成要素「泉」が使用されたもの、「臍」はオランダ語 *alvleesch* の *al* の部分を「あつまる（萃）」と解釈して構成要素としたものである。蘭学者による翻訳語の試行錯誤については、拙著『医学をめぐる漢字の不思議』（西嶋 2022）においてもその実例を紹介した。

蘭学者が翻訳するにあたっては、翻訳語の説明に漢籍を引用することなどから、漢籍・字書の用例を博搜した形跡がうかがえることが指摘されている（張 2013）。例えば『重訂解体新書』において乳汁を表す「乳」の説明には『春秋左氏伝』が引用されている。これは当時の学問の正統である漢学に対して、新興の蘭学の地位を確保するための手段として、既存の知の体系の延長上に位置づけようとする意図があったと考えられる（岸田 2008）。

なかでも筆者が博士論文において着目したのは、漢字一字の翻訳語を追求した二人の蘭学者、野呂天然（1764-1834）と海上随鷗（1758-1811）である。野呂天然は学統が不詳な蘭学者で、医学だけでなく文字学、国学の著書もある人物である。解剖学書『生象止観』（1813 年刊）には、既存の漢字を転用した漢字一字の用語を志向した旨が述べられ、100 字以上の転用された漢字が使用されている。例えば、静脈という意味で用いられる「盪」という字は、『康熙字典』が『字彙補』を引いて「血上心也」とする字で、心臓に血がもどるところから静脈の名前に転用している。リンパ管を意味する「罎」は『説文解字』で「水脈也」とある字であるが、リンパ管はオランダ語で *water-vaten* であり、直訳すると「水の管」すなわち「水脈」となる。つまりこれはオランダ語の知識および漢字字書の知識を経由した漢字の転用ということになる。もう一人の海上随鷗は、稲村三伯の名で初の蘭日辞書『波留麻和解』の編纂をしたことで知られる人物であるが、後年、名を改め京都・大坂で蘭学塾を開いた。海上随鷗が医書で使用する用語には、独自の偏旁による 1000 字以上の造字が見られる。例えば、鎖骨下動脈を表す造字は「轔」（左に行、右に曷を配置した一文字）である。動脈を表す造字にはすべて構成要素「行」が含まれ、この「行」は漢方医学にいう血をめぐる「行血」から来していると思われる。また「曷」は「肩骨」を表す「轔轔」の「轔」字の旁をとったものと思われる。そしてその要素の構成の背後には、*ondersleutel-slagader*（下 - 鎖骨 - 動脈の意）というオランダ語がある（西嶋 2026: 第 1 部）。

以上の例からも、翻訳語がオランダ語や漢籍などの知の結晶であることがうかがえよう。

III. 学術用語の量産を可能にする模借法——翻訳語の作成方法という視座

こうした知の動員のあり方を、術学的と言って切り捨てることも可能だが、そこには一定の規則性が見出せる。蘭学者たちは、場当たりに翻訳語を作成していたのではなく、漢字・漢語の体系を活用しながら、オランダ語を日本語に置き換えるための方法を意識的・無意識的に共有していたと考えられる。筆者はこのうち「模借法」（沈 2007）と呼ばれる方法に着目してきた。模借法とは、複合語を形態素に分解し、形態素ごとに訳をあてて結合する方法のことで、翻訳借用 *loan translation* (*calque*) に相当する概念である。例えばオランダ語 *twalf vingerige-darm* から *twalf* が 12、*vingerige* が指、

darm が腸であることから「十二指腸」という訳語を導くようなことである。複雑な概念が複合語によって表されることが多い学術用語において、この模借法によって学術用語の翻訳を容易かつ大量に行うことが可能になり、現代の学術用語にも多く使用されている。この模借法、すなわち翻訳語の作成方法に着目するという視座は、これまであまりとられていなかった。

学術用語において模借法を特に漢語の形で用いること、即ち「十二本の指の幅の腸」（筆者の作例）のような句の形式ではなく「十二指腸」という漢字の連続とすることは、現代からすれば自明のようであるが、その始まりは18世紀の後半である。これを明らかにするには訳語の作成方法の実態を観察する必要がある、そのためにはいわゆる「直訳」「義訳」といった、翻訳語を記述するために伝統的に用いられてきたタームがかえって足枷になる。そこで筆者は、オランダ語複合語と翻訳語とを形態素ごとに観察し、意味的な対応関係を記述するという研究方法を導入した。これにより、漢語による模借法の使用例は、長崎通詞本木良永・松村元綱による天文学書『天地二球用法』（1774年成る）や上述の杉田玄白・前野良沢ら『解体新書』（1774年刊）が最初期のものであることが明らかになってきた。

さらには、上述の海上随鷗の造字においても、模借法が適用されていると見ることができる。上述の例を使うと、「轔」の原語 *ondersleutel-slagader* のうち *onder* は捨象されているが、*sleutel* が轔、*slagader* が行となり、それが結合されている。模借法の構成単位を、漢字一字とするか漢字の構成要素とするかという違いはあれど、両者には共通の模借法という方法が通底していることになる。このことで、一見学術的にみえる漢字一字の翻訳語にも、方法論上の連続性を見いだすことができ、翻訳語史の描き方を深化させることができる。

以上が模借法という視座によった筆者の博士論文（西嶋 2026: 第2部）の概要であるが、なぜ一字の造字を行ったのかや、天文学と医学という別分野においてほぼ同時期に模借法が発生した要因、幕末明治の人文科学系の翻訳語の創出との連続性などは展開の余地として残されており、今後取り組む予定である。

ところで、この模借法というのはオランダ語 - 日本語（漢語）間に特有の現象ではない。模借法は、かへりごと - 返事、おほね - 大根のように和語と漢語の間にも生じるものであるほか、仏典漢訳においても用いられ、ラテン語 - オランダ語の間でも用いられる（例：ラテン語 *triangulum* - オランダ語 *driehoek*、三 - 角の意）。広く他言語を含んだ翻訳一般において、蘭学者の例は語彙の創造だけでなく文字の創造をも伴うという点で特殊と思われるが、他言語の諸現象との比較によってさらなる検討を加えていくことが可能だろう。

IV. 言語現象が歴史を証言する——科学史への展開

前節で述べたように、翻訳語の作成方法を分析することは、語学的な知見をもたらすにとどまらない。ある蘭学者が特定の翻訳語を使用しているという事実は、その蘭学者が特定の書物を参照していたこと、あるいは特定の人物から影響を受けていたことの傍証となりうる。言語現象は、文献や人物の影響関係を検証するための独立した証拠として機能する。

例えば、ある翻訳語が複数の蘭学書に共通して使用されている場合、それは書物間の影響関係を示す手がかりとなる。筆者が現在取り組んでいる天文学用語の例を挙げると、本木良永・松村元綱『天地二球用法』（1774年刊）はオランダ語の天文学書の翻訳であるが、その中に「回帰線」という用語

が使用される。この語は同じく長崎の小林謙貞（1601-1683）の『二儀略説』に使用されていることが指摘されている（荒川 1997）。一例だけでは偶然かもしれないが、他にも『天地二球用法』の訳語のうち、他の漢訳洋書にはなく『二儀略説』には使用される用語として「和帯」（温帯の意）もあることから、『天地二球用法』の翻訳者が『二儀略説』を参照していた可能性は高い。『二儀略説』はゴメスの天球論からキリスト教的色彩を脱色したものとわれ、キリシタンの時代の宇宙論を伝えるものである。同様の方法で『天地二球用法』の用語の典拠として漢訳洋書の影響も明らかにすることができる。翻訳語に着目することで、知の源泉や伝播を解き明かす傍証を得ることができるのである。

逆に、同一概念に対して異なる翻訳語が並立している場合、それは蘭学者間の流派や地域的なネットワークの差異を反映している可能性がある。例えば、オランダ語 *zenuw* が表す事物に対して「神経」という語を用いることが、江戸の蘭学そして現在にいたるまで主流である。対して 19 世紀初頭の京都、海上随鷗一門では「白脈」という別の用語が使用されていた。翻訳語の分布を地理的・時間的に追跡することで、知識がどのような経路で日本各地に伝播したかという科学史・医学史上の問いに答える有効な手段となりうる。

筆者はこれまで医学史を中心に研究を進めてきたが、現在は天文学史へと研究対象を広げつつある。分野が変わっても、翻訳語という切り口は一貫して有効である。むしろ医学・天文学という複数の分野を横断することで、天文学系の書籍を医師が参照していた事実が明らかになるなど、近世蘭学における知の受容の全体像が浮かび上がってきており、今後さらに他の分野にも発展させていきたい。

V. 資料と書誌学——デジタル時代への期待と課題

以上の研究を支えるのは、一次資料の調査・収集である。翻訳語の分析は、活字化・翻刻された資料だけでは不十分であり、原典資料の書誌的情報（書写・刊行の年代、版や本文の異同、所蔵の経緯）が研究の精度を左右する。筆者はこれまで医学史・天文学史にまたがる蘭学書の書誌調査を全国各地で行ってきた。その過程で、筆者が研究を始めた当初には所在が不明であった資料の所在が判明したり、新出資料を発見したりする事例に繰り返し遭遇してきた。

近年、国立国会図書館デジタルコレクションをはじめとする資料のデジタル化が急速に進み、遠隔地からでも原典資料に接することができる環境が整いつつある。これは研究の利便性を飛躍的に高めるものであり、大いに期待される。しかしその一方で、デジタル化には課題も伴う。デジタル化される資料は必然的に選別を伴い、デジタル化されない資料は相対的に埋没するリスクがある。筆者がこれまで研究を大きく進めることができたと感じた資料のほとんどは、現在もデジタル化されておらず、またその予定もないものである。デジタル化の進展は、書誌学的調査の重要性を低下させるものではなく、むしろその価値を再認識させるものであると筆者は考える。

またデジタル化によって大量に公開された資料群には、まだ日本語史あるいは科学史的な検討がなされておらず位置づけが不明なものも少なくない。デジタル化の画像の文字認識技術の進歩によって、大量の画像から正確な翻刻テキストを簡便に得ることも遠くない時期に可能であろう。デジタルアーカイブの構築からその有機的な検討が盛んになった時に日本語史研究、科学史研究も飛躍的に進歩すると思われるが、その際に律速となりうるのが実は文献学的な検討なのではないかと考える。筆者はデジタルヒューマニティ（人文情報学）の知見も取り入れつつ、地に足のついた文献学も継続することで、多分野と協働できる研究者を目指そうと考えている。

※本研究報告は、JSPS 特別研究員奨励費の「蘭学期の翻訳語作成方法の研究—一字の訳語を中心に—」(24KJ1370) および「漢字の『文字構成論』の構築—蘭学の一文字訳語に着目して—」(26KJ0225) の成果の一部を含むものである。

参考文献

- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』 白帝社.
- 岸田知子 (2008) 『漢学と洋学：伝統と新知識のはざままで』 大阪大学出版会.
- 沈国威 (2007) 「蘭学の訳語と新漢語の創出」内田慶市・沈国威編『19 世紀中国語の諸相：周縁資料（欧米・日本・琉球・朝鮮）からのアプローチ』雄松堂出版, 217-261 頁.
- 張哲嘉 (2013) 「《重訂解體新書》譯詞的改定與方法」鈴木貞美・劉建輝編『東アジアにおける知的交流：キイ・コンセプトの再検討』国際日本文化研究センター, 225-235 頁.
- 西嶋佑太郎 (2022) 『医学をめぐる漢字の不思議』大修館書店.
- (2026) 『蘭学と漢字：医学語彙の研究』京都大学博士学位論文（人間・環境学）.